

日本語から見た中国語の「中国語らしさ」

山梨大学 町田 茂

1. はじめに

対照研究の目的は、教育、言語学的探究の2つの方向に区分できる。教育を目的とした対照研究は、学習者が直面する一つ一つの具体的課題を解決する上で欠かすことができない。

- (1) 音声: 「ウ」と「u」、「オ」と「o」、「シ」と「xi」など。
- (2) 単語: 日中同形語における相違 医院 文明 工作 活動
- (3) 文法: 「タ」と“了”, 「テイル」と“在”“着”, 「の」と“的”

これらの対照研究は結果が見えやすく、中国語や日本語の学習にとって極めて有用である。

一方言語学的探究を目的とした対照研究においては、表面上異なる現象の根底に潜む共通の原理・原則を求めたり、ある理論的素地に基づいて異なる言語の特徴を浮かび上がらせる、といったアプローチがなされてきた。今回は、このようなアプローチにとらわれずに、日本語母語話者が中国語を学ぶ際に遭遇する壁を出発点として、中国語がどんな特徴を有するのか検討してみたい。

2. 文の定義

日本語は、動詞や形容詞が「終止形」という強制終了の手段を有することから、情報量の多寡にかかわらず、形式上文を定義することが可能である。それに対し、中国語は文の定義が難しい。

(1) 我喝茶。

(1)は、単独で見ると文としての成否の判断が難しいが、喫茶店でメニューを選ぶ場面では成立する。

(2) 我吃了包子。

(2)は中国語教師から「単独では使えない」と指摘される代表例だが、もし猫が包子を食べるのを目撃した人がその現場報告として(3)を用いたらどうであろうか。

(3) 猫吃了包子。

話者と事象の関係が直接的であったり、情報の重要性が高いとき、単純な表現でも完結した文として受け入れられやすい。ここから、文の完結性は、話者の事象とのかかわり方や情報の重要性（非日常的な事象は情報の重要性が高い）によって変化すると言ってよい。ここに文の定義の難しさがある。

3. “長句”における動詞句の連接

私達が接する文字化された言語資料で比較的多いのは、文学作品や新聞記事など、発話時点において既に発生済みの事象を叙述するもので、このような条件下では、一区切りの発話(utterance)を構成するとき、述語表現が多用され、まるで動画を一コマ一コマ言語化したような長い「文」が作られる。

(4) 僕が窓際の席に一人で座って食事をしていると、四人づれの学生が店に入ってきた。男が二人

と女が二人で、みんなこざっぱりとした服装をしていた。

我找个靠窗的位置坐下，一个人吃着饭。这功夫，进来一伙学生，四个人，两男两女，都打扮得干净利落。(ノルウェイの森)

動詞句を多用した「文」には、途中で切れ目のない連動構造と途中で切れ目のある“長句”がある。連動構造は会話中でも文章中でも多く用いられるが、前後の動詞句の間に一定の意味関係が生じるように構成される。(b)(c)(d)は事象が発生する時間的前後関係と一致している。

(a)前段が後段の動作の方法や動機

(5)于是徐太太便充当“捧哏”的角儿，配合丈夫把这段“相声”说完。(皇城根)

(b)前段が後段の動作の材料・手段の入手や使用

(6)「だいじょうぶよ。一晚ぐらいどこだって寝られるわ。」

“没有什么，一晚上随便找个地方对付一下就行了。”(転落の詩集)

(c)前段が身体部位の動き・全身の動作、後段がそれに続く動作

(7)彼女は眠ろうとした。

她想闭眼睡上一会儿。(転落の詩集)

(d)前段が移動や存在、後段が前段で提示された移動先・存在位置での動作

(8)他只能回老家插队。(许爷)

一方“長句”も、前後のフレーズの間一定の意味関係が生じるように構成される。

(a)時間的前後関係

事象が生じる時間的前後関係に沿ってフレーズを並べていく。

(9)她从腰里解下一大串钥匙，开了中间堂屋的黄铜老锁。(皇城根)

前後のフレーズに時間的前後関係を持たせるために、いくつかの特定の語が用いられる。

(10)立ち上がる時に向こうを見ると、路から左のほうにバケツを伏せたような峯が聳えている。

站起来的时候向前一望，看见路的左边耸立着一个山峰，象一只倒置的桶。(草枕)

(11)“前些日子立平跟我说了你们的事，害得我几夜都合不上眼，…”(秋天里的春天)

(b)累積の関係

前段で提示された事物に対し、後段でさらに説明を加えていく。以下の(12)(13)はいわゆる兼語式に近い論理関係だが、使役機能はない。

(12)“路教授引出了新的话题，就是广告合社会进步有很密切的关系。”(中央电视台)

(13)“我看过一篇文献，进人的精神最低落的时候大概是在下午6点到8点的这个阶段，…”(中央电视台)

(c)追加の関係

前段で提示された内容に対し、後段でさらに詳しい内容を追加する。前段と後段の間に時間的前後関係は認められない。

(14)杨妈朝她摆手，生怕惊动了金一趟，…(皇城根)

(15)被告自身が私にむかって、男にすてられ子供をかかえてまともに生きて行く気になれないという意味の述懐を述べたこともあります。

被告人曾对我说过她的往事，觉得自己被男人抛弃，又有孩子，实在没有心思再正儿八经地生活

下去。(転落の詩集)

(16) 金枝自己拿钥匙打开了院门, 本想轻手蹑脚地回自己屋, 省得惊动别人, …(皇城根)

このような前後関係を保っている限り、前後のフレーズ中の主語や賓語はかなりの頻度で無形化される。

(17) 棋場の标语标志早已摘除, 出来一个人, [0] 见这么多人, 脸都白了。(棋王) (時間)

(18) 她演出结束, 误了末班车, 遇上了刚刚运完西瓜的王喜, [0] 把她送回了家。(皇城根) (時間)

(19) “我姐五年没生孩子, 姐夫急疯了, 就去算卦, [0] 说他命中注定有个儿子。”(皇城根) (時間)

(20) “你家凤英, 跟那个人常来往, 我们好多人都看到过[0]。”(天国逆子) (累積)

(21) “你为什么老是事后才把事情抖露出来, 事先就不跟我商量一下[0]?” (皇城根) (追加)

中国語文法の特徴を論ずる際、しばしば語順の重要性が挙げられる。しかし、統語論的視点から見たとき、中国語の語順にはかなりの弾力性があり、他の言語と比べて語順の重要性がどれだけ高いのか、検証が難しい。一方、フレーズを接続させて連動構造や“長句”を形成する際、フレーズ間にいくつかの典型的な意味関係を構築するよう、フレーズの順序が工夫されている。この点は、中国語の「中国語らしさ」と言えるのではないか。

4. 話者の事象との関りと発話 (utterance) における reality の必要性

中国語において、連動構造や“長句”などの比較的長い発話 (utterance) が多用されることを見た。長い発話 (utterance) は、事象の発生状況を動画の一コマ一コマのように、reality を持って伝えている。このような視点で中国語文法を見直すと、中国語では、これ以外にも、発話者の事象への細かな観察や発話者が心の中に描く事象を具体的に言語化する手段が用いられている。これらの手段を用いることで表現に reality が与えられ、それにより発話者の発話意図を伝えることが可能となっている (ここで reality という言い方をするのは、reality は実現済み、未実現のいずれの事象の叙述にも認められるからである)。

中国語において、単独の名詞、動詞、形容詞は、概念を表すことができるものの、何も前提が存在しない場合、単独では現実世界に存在する個別の事物や事象を表しにくい。特に新情報・重要情報として提示する場合、概念を現実世界に結び付ける手段が必要であり、これらの手段は、表現に reality を与えることになる。

4.1 名詞と名量詞

単独の名詞を新情報として提示するとき、量詞を付加することで、現実世界 (話者がイメージする空想世界を含む) に存在する個体を指示対象とすることができる。

(22) 妈, 我给您盛碗汤。(欢欢乐乐)

(23) 我找个车送送你吧。(爱如风过)

“找车”という動作をイメージするとき、量詞“个”が選ばれる。(22)(23)は話者の意思表示であり、話者と事象は直接的に関わっている。情報の重要性、きわだち (saliency) には程度差があり、これが“个”の必要性の差異を生んでいる。

(24) 你给老师打个电话就可以了。

(25) 等放学以后, 我再给你打电话。

(24)における“打电话”は(25)における“打电话”より重要できわだった事象であり、“个”の必要性が高い。

4.2 性質形容詞と程度副詞、状態形容詞

性質形容詞を述語にすると、程度副詞が付加されることがつとに知られている。程度副詞は、話者が性質形容詞が表す性質に対し一定の把握を有する証であり、これにより、事象を現実世界に関連づけることができる。一方、旧情報であったり話者による事象の把握の必要が無い場合には、程度副詞は用いられない。

(26) a 这个西瓜甜吗? b 甜。

(27) 哪个甜?

(28) 品质优良 价格昂贵 内容丰富

(29) 胆子大/小 耳根子软 脸皮厚/薄

性質形容詞が表す性質を現実世界に関連付ける手段は程度副詞の付加だけではない。他の手段を用いるなら、程度副詞は不要となる。

(30) 她穿得那么漂亮。

(31) 好一点儿

(32) 好得多

また状態形容詞は本来的に reality を有し、現実世界との関連が強い。そのため、述語になる際程度副詞を必要としない。

4.3 動詞に関して

何も前提が存在しない場合、単独の動詞は現実世界との関連が弱い。動詞を現実世界に関連付ける手段は非常に多い。

4.3.1 動量詞

動量詞は、名詞に付加される名量詞と同様、動詞が表す動作に reality を与え、当該動作を現実世界と関連付ける。

(33) 我先洗把脸，完事咱们说。(爱如风过)

(34) 我没什么事，顺便过来看一眼。(大上海小爱情)

重ね型にも同様の機能を認めることができる。

(35) 给你打了好几次电话你也不接，所以过来看看。(爱如风过)

この三例はいずれも話者自身の動作を述べている。「動詞+動量詞」や重ね型は話者の意図する動作を具現しており、いずれも reality を持った表現となっている。

4.3.2 空間表現

空間表現は、特に連動構造や“长句”において、移動の軌跡をまるで一コマ一コマ絵に描くように言語化していくことができる。

(36) 像是跟谁赌气似的，“大发”车猛地一蹿，呼呼地向前冲去，转眼就消失在车流里。(皇城根)

(37) 她打开冰箱，从里面拿出一只冻鸡，又跑进厨房，把鸡泡进水池里解冻。(皇城根)

(38) ガラス戸の蔭から様子を見ていると、…

站在玻璃拉窗后面往外看时… (かけず)

(39)「そう。ねえ、駅まで行くんでしょう？向こうの角までいっしょに行きましょう。」私達は歩き出した。

“是啊！喂，你是要去车站吧，我们一块走到对面拐弯处吧！”我们一起朝那边走去。（白河夜船）

(40) 計器文字盤の限界をこえた針はむなしく震えつつけている。

指针越过了计算器盘上的最高限度，徒然无劳地在那里颤动。（個人的な体験）

これらの例においては、状語が空間情報を提供している。(40)においては、“在那里”という空間表現が加わったことにより、“颤动”が話者の眼前で発生しているかのような reality が生じている。状語以外に、方向補語も、移動の軌跡を一コマ一コマ描くように言語化することに有効な手段である。

(41) 一眼瞥見晃荡着的电话话筒，他急步跑过去，把它挂上，然后一把抓住何丽珠的手：…（未穿的红嫁衣）

4.3.3 状況描写性状語

状況描写性状語も一コマ一コマの動作に、まるで話者の眼前で生じているかのような reality をもたらす。

(42) 金枝出院门的时候，小王拦住她，上下打量着，惊叫起来：“呀，你这要飞哪儿去呀！”（皇城根）

(43) それから彼女は僕の方を向き、にっこりと笑い、少し首をかしげ、話しかけ、僕の目をのぞきこむ。まるで澄んだ泉の底をちらりとよこぎる小さな魚の影を探し求めるみたいに。

随之，她朝我转过脸，甜甜一笑，微微地低头，轻轻地启齿，定定地看着我的双眼，仿佛在一泓清澈的泉水里寻觅稍纵即逝的小鱼的行迹。（ノルウェイの森）

動量詞を用いた動作量表現や重ね型は話者が直接関与する動作に reality を与えるのに有効で、空間表現や状況描写性状語は、話者が直接関与しない事態を疑似現在から現場報告するとき有効である。

5. 広義の mood と reality

中国語が、名詞・形容詞・動詞それぞれに対し reality を与える手段を有し、連動構造や“长句”も現場報告のような reality を有することを見てきた。これらの手段は、どのように使い分けられているのであろうか。ここには、話者と事象との関係が直接的か否か、事象が未実現か実現済みか、疑似現在からの現場報告なのか否かなど、いくつかの要因が関与している。ここでは、これらの要因を広義の mood と考えておく。

(A) 話者が発話現場において未実現の事象の実現を希求・予測するとき

このとき、話者と現場の関係は直接的であり、その直接的関係の中にすでに reality が存在する。そのため、数量表現や重ね型を用いるだけでも十分に発話意図を伝達することができる。

(44) (=22) 妈，我给您盛碗汤。（欢欢乐乐）

(45) (=23) 我找个车送送你吧。（爱如风过）

(46) (=33) 我先洗把脸，完事咱们说。（爱如风过）

(B) 話者が発話現場において眼前に発生している事象を述べるとき

このとき、話者と眼前の現場の関係そのものに reality が存在する。そのため、短い発話でも十分に発話意図を伝達することができる。

(47) (=34) 我没什么事，顺便过来看一眼。(大上海小爱情)

(48) (=35) 给你打了好几次电话你也不接，所以过来看看。(爱如风过)

(49) 我真是服了你。(让爱作主)

(50) 对不住您了，孙先生。(人虫)

(47) (48) は実現済みの事象であるが、“看了一眼”“看了看”とすることはできない。

(C) 話者が疑似現在からの現場報告を行うとき

このとき、事象の推移を一コマ一コマ描き出す連動構造や“長句”が多く用いられる。

(51) (=5) 于是徐太太便充当“捧眼”的角儿，配合丈夫把这段“相声”说完。(皇城根)

(52) (=17) 棋场的标语标志早已摘除，出来一个人，[0] 见这么多人，脸都白了。(棋王)

(53) (=37) 她打开冰箱，从里面拿出一只冻鸡，又跑进厨房，把鸡泡进水池里解冻。(皇城根)

(54) (=43) それから彼女は僕の方を向き、にっこりと笑い、少し首をかしげ、話しかけ、僕の目をのぞきこむ。まるで澄んだ泉の底をちらりとよこぎる小さな魚の影を探し求めるみたいに。随之，她朝我转过脸，甜甜一笑，微微地低头，轻轻地启齿，定定地看着我的双眼，仿佛在一泓清澈的泉水里寻觅稍纵即逝的小鱼的行迹。(ノルウェイの森)

これらは事象を時系列的に描き出す効果が有り、話者が観察した事象をそのつど言語化していくため、実現済みの事象であっても“了”の必要性は高くない。

(D) その他

事象の発生やその様態の伝達が発話目的ではなく、事象に関する詳しい情報を提供しようとするとき

このとき、“長句”の前後のフレーズの間にも累積の関係や追加の関係を構築する。。

(55) (=12) “路教授引出了新的话题，就是广告合社会进步有很密切的关系。”(中央电视台)

(55) において前半は話者の眼前で生じた事象を述べ、後半は“新的话题”の内容を述べている。

(56) (=15) 被告自身が私にむかって、男にすてられ子供をかかえてまともに生きて行く気になれないという意味の述懐を述べたこともあります。

被告人曾对我说过她的往事，觉得自己被男人抛弃，又有孩子，实在没有心思再正儿八经地生活下去。(転落の詩集)

(56) において前半は回想を通して事実を示し、後半はその事実における“她”の心情を述べている。

6. “了1”“着”“过”の文法記述について

“了1”について、研究者の関心はその文法的意味、“了1”を用いたフレーズを一文として完結させる条件、それと有界性との関連などに向けられてきた。しかし以上の観察から、短いフレーズで完結可能か、“長句”が必要とされるかは、広義の mood と、それとの関係で生じる reality によって決められていると考えることができる。換言すれば、中国語文法には、語と語の結合関係規則に代表されるような意味や形式を根拠として記述できる世界と、実際にどの形式を用いるか

を決定づける広義の mood の世界が有るということである。そのため、後者を考慮しない“了1”の文法記述は、言語事実との乖離に直面する。

先の(B)において、“了1”を用いない用例を挙げた。同様の用例は大量に存在する。

(57) 今天休息，自己给自己放个假。(将爱情进行到底)

(C)においては連動構造や“长句”が多く用いられ、ここに空間表現や状況描写状語が用いられると、疑似現在からの reality の有る現場報告となり、“了1”の使用は、動詞そのものの“了1”の必要度、動詞の音節数、当該事象の重要度など様々な要素の影響を受ける。

(58) 有天早上，我上学的时候看见他和妈在路口说话，看见我过来，他们分开，妈去赶车，他进了胡同。(我和爸爸)

(59) 那马打了响鼻，尥我一蹶子，我慌忙躲开。(过把瘾就死)

“了1”の“长句”中の使用に関して絶対的基準を設けることは難しい。

一方、“了1”と意味機能が近い“过1”は(A)、(B)に用いることはできず、(C)には用いることができる。

(60) 大家吃过饭，喝了水，又骑上马，继续奔驰。(CCL)

“了1”“过1”の差異は、意味機能だけでは説明しきれず、広義の mood を考慮する必要が有る。

“着”は(C)において多く用いられる。

(61) (=4) 僕が窓際の席に一人で座って食事をしていると、四人づれの学生が店に入ってきた。男が二人と女が二人で、みんなこざっぱりとした服装をしていた。

我找个靠窗的位置坐下，一个人吃着饭。这功夫，进来一伙学生，四个人，两男两女，都打扮得干净利落。(ノルウェイの森)

(62) (=42) 金枝出院门的时候，小王拦住她，上下打量着，惊叫起来：“呀，你这要飞哪儿去呀！”(皇城根)

(63) (=43) それから彼女は僕の方を向き、にっこりと笑い、少し首をかしげ、話しかけ、僕の目をのぞきこむ。まるで澄んだ泉の底をちらりとよこぎる小さな魚の影を探し求めるみたいに。随之，她朝我转过脸，甜甜一笑，微微地低头，轻轻地启齿，定定地看着我的双眼，仿佛在一泓清澈的泉水里寻觅稍纵即逝的小鱼的行迹。(ノルウェイの森)

“着”はこれ以外に(A)、(B)において話者の意志表示や命令に用いることができる。

(64) “哎，我想着这事儿，妈。”(爱如风过)(A)

(65) 他们说的不对呀，你先那么听着，别往心里去，现在不是非常时期吗?(老屋)(B)

(64)は未発生動作を行うという意味表示であり、(65)は実現済みの動作(“听”)以外を行わないよう求める命令である。

“了”“着”“过”の文法記述において、アスペクト論を基軸とした方法論が定着している。しかし、中国語文法に、統語論の層の上に広義の mood というもう一つの層がかぶさっていることを考慮することにより、文法記述を言語事実と一致させていくことができるのではないか。

7. まとめ

日本語は語形変化を有し、テンス・アスペクトの両者を有すると認めることもできるかもしれ

ない。また、日本語には多様な助詞が存在し、助詞の使い分けにより多様な表現が可能となっている。この観点に基づいて中国語を観察すると、中国語には語形変化もテンスも多様な助詞も無いことになり、中国語の特徴は「～が無い」という否定的側面に関心が向けられることになる。現在ではこのタイプの対照研究は避けられ、認知言語学の理論的背景に基づき、一定の基準に基づき日本語、中国語の特徴を捕えようとする研究が行われている。一方、本発表が目指したのは、日本語に無く中国語が有する特徴をクローズアップしようとする方向性である。本発表の要点は、以下のように総括することができる。

- (1) 中国語文法は、文法機能語の文法的意味や統語規則の記述だけでは言語事実を説明しきれない。中国語の発話 (utterance) には広義の mood に適合する reality が必要とされ、reality の実現のために様々な語彙的・文法的手段が活用される。
- (2) reality を実現するための語彙的・文法的手段は多様である。
 - (a) 名詞に付加される名量詞
 - (b) 性質形容詞に付加される程度副詞・数量補語・程度補語
状態形容詞は本来的に reality を有する。
 - (c) 動詞に付加される動量詞・空間表現・状況描写状語・時態助詞
 - (d) 連動構造や“長句”
- (3) 広義の mood は事象が現実相 (realis) か非現実相 (irrealis) か、話者と事情の関りが直接的であるか否か、などの要素によって決められる。
- (4) 広義の mood と reality を実現するための語彙的・文法的手段には相関関係が認められる。話者が発話現場において未実現の事象の実現を希求・予測するときや話者が発話現場において眼前に発生している事象を述べるときは、限られた数の語彙的・文法的手段を用いるだけで十分である。それに対し、話者が疑似現在からの現場報告を行うときは、連動構造や“長句”が多く用いられ、しかも空間表現・状況描写状語も用いて事象を時系列に沿って一コマ一コマ動画のように描いていく。
- (5) “長句”における各フレーズ間の意味関係を維持するため、“害得”“就是”“讲”“觉得”“省得”などの語句が用いられる。一方、フレーズ間の論理係が容易に理解できる状況下では、主語や賓語となる名詞句の無形化が頻繁に発生する。換言すれば、“長句”における名詞句の無形化は、フレーズ間に成立する論理関係に支えられているということである。
- (6) 連動構造や“長句”におけるフレーズ間の意味関係は時系列の前後関係に留まらず、特に“長句”においては、累積の関係や追加の関係も認められる。
- (7) 中国語文法でしばしば問題とされる「文体の差」は、本発表の枠組みでは、広義の mood の差異に基づく reality を実現するための語彙的・文法的手段の差異である。文学作品の多くは疑似現在からの現場報告であり、論説文における抽象的表現は reality の必要度が低い。
- (8) 従来の中国語文法研究には、「母語話者の語感に合うか」という主観的判断に頼らざるを得ない側面が有った。特に「文」の完結性については、母語話者の語感に頼り人為的に文を定義していたかもしれない。本発表は、この「語感」の根拠に接近しようとする試みでもある。

総じていうなら、中国語には、統語論の範囲を越えて、広義の mood に応じた reality を実現させるための緩やかな文法規則が存在する。この文法規則は時として連動構造・“長句”の使用を要求する。そのため、中国語では「文」の定義が難しい。ここに中国語の「中国語らしさ」がある。

本発表の主張は、母語話者から見ると、何も目新しいものが無いのかもしれない。しかし、日本語を通して中国語を眺めると、これらは日本語には無い「中国語らしさ」であり、日本語との対照を通してより明確に意識できるようになるのではないだろうか。

本発表は、主に発表者の以下の既発表資料を基礎に再構成したものです。

町田茂 1997 「動詞句連接試論」、『中国語学』第 244 号

町田茂 1998 「現代中国語の動詞句連接及び主語・主題」、『山梨大学教育人間科学部研究報告』第 49 号

町田茂 1999 「動詞句連接における名詞・動詞の無形化と推論」、『中国語学』第 246 号

町田茂 2000 「現代中国語における方向表示介詞句の描写機能」、『山梨大学教育人間科学部紀要』第 1 巻 2 号

町田茂 2000 「現代中国語多動詞文における状況描写状語」、『山梨大学教育人間科学部紀要』第 2 巻 1 号

町田茂 2015 「试论基于[+reality]特征性的现代汉语框架」、『現代中国語研究』第 17 号

町田茂 2019 「现代汉语中[直接性][临场性][现实性]特征与语法规则的相互作用」、『現代中国語研究』第 21 号